

vivo

9 SEPTEMBER 2005

CONTENTS

ミト・デラルコ第8回演奏会	1,2
ソング・シアター	
ワイルからガーシュインへ	2,3
最近の公演から	3,4
vivoice	5
インフォメーション	6



写真左・上;ミト・デラルコ 右・上;E.バルサ 左・下;前田祐希 右・下;佐藤允彦

チェロを加えた弦楽五重奏が、初秋の空と美しく響きあう。

9 / 11 (日) ミト・デラルコ第8回演奏会

ミト・デラルコ第8回演奏会は、ポツケリーニ (1743 ~ 1805) とシューベルト (1797 ~ 1828) の2つの弦楽五重奏曲を組み合わせたプログラムです。2人の作曲家はともに、弦楽四重奏にチェロを1本増やした比較的珍しい編成の弦楽五重奏曲を書いていることで共通しています。ふたつの五重奏曲の出会いは、私たちをどのような世界に連れて行ってくれるのでしょうか。メンバーの鈴木秀美によるエッセイをどうぞご覧下さい。

ペンタゴン
芸術的五角形

鈴木秀美



ハイドン以来多くの作曲家が弦楽四重奏を書いていることと比較しても明らかなように、チェロ2本の五重奏という室内楽の形態はやや珍しい。弦楽五重奏としては他にモーツァルトやブラームスなどが即座に思い出されるが、それらはチェロではなくヴィオラが2本のものである。

チェロ2本の五重奏を最も多く作曲したのはポツケリーニだが、生きた時代こそ彼と少々重なっているものの、おそらく何の繋がりもなく、作風も人生模様もまるで違っているシューベルトが同じ形態の五重奏曲を書いていることは興味深い。

自身が卓越したチェリストであったポツケリーニがチェロ2本の室内楽を多く書いたことは容易に理解できるが、シューベルトは何故、それもこの1曲だけ弦楽五重奏を書いたのだろうか。シューベルトは神学校時代、オルガン、歌唱と共にヴァイオリンを学んでいるものの、弦楽器奏者として知られていなかったわけではない。

シューベルトがポツケリーニを、或いは彼の作品を知っていたという話は聞いたことがないのだが、アンナー・ピルスマは「きっと知っていたに違いない」という。知らなかったならなぜあの五重奏を思いついたか。世の中には物の本に書かれない多くの歴史があるのだよ、というわけである。確かに私たちは、多少の本を読んで歴史を分かったつもりになっているのかもしれないし、書かれたことより書かれない歴史の方が多いのは当然である。

シューベルトは1816年6月に、前述のモーツァルトの五重奏曲(おそらく短調K 516)を聴いて深く感動したことを日記に書き留めている。それと同様に、当時のウィーンで無数に行なわれていたサロン・コンサート等のどこかにポツケリーニの室内楽が含まれていて、たまたまシューベルトが居合わせていたとか、いつかはウィーンにいたこともあるポツケリーニについてシューベルトが聞き知ったとかいうことがあったなら...と想像

するのは楽しい。残念ながら、ポツケリーニを愛するピルスマの想いを支持する裏付けは取れていない。

さて、弦楽四重奏のバスがもう一人増えただけのようにも見えるこの五重奏、下手をすれば低音ばかりが勝ちすぎて重い響きになってしまいそうなものである。しかしこの二人の天才は、その特殊性を生かし、それぞれ特徴ある響きの世界を創りだしている。

ポツケリーニの五重奏については以前「The Great Clock Shop」という文を書いたことがあるので、ご記憶の方もおられるかも知れない(編集部註:2002年4月の第4回演奏会プログラムに掲載。鈴木氏の著書『ガット・カフェ』でも読めます)。『ポツケリーニの音楽は、大きな時計屋に入ったようなものだ。振り子や歯車等の音がたくさん聞こえてくるが、何も動かず、そして静かである。主題や構造を探すのではなく、そのシチュエーションそのものを味わうのが良いのだよ。』といったピルスマの秀逸な表現をご紹介したものである。もちろんポツケリーニとしてそればかりではないが、音楽の定石をまるで無視するかのように同じ型のフレーズを3回も4回も、時には8回も平然と繰り返してしまうそのような作風は実に印象的だ。

今日お送りするホ長調G 275には、これまたピ



間宮芳生

ルスマ曰く『世界で最も有名な』《メヌエット》が含まれている。ヴァイオリンのソロでも弦楽合奏でもなく、この弦楽五重奏が原曲なのだが、これもまたそのような雰囲気を持った曲の一つである。もちろん例のメロディが奏でられるのだが、それとて積極的な進行性やストーリー性を持って展開するといったものではない。旋律もまた、周りの「時計屋的」ノイズと共に在るのである。

自身が第1チェロを、王子や王が第2チェロを受け持つことが考えられている彼の曲では、第2チェロは重要ではあるものの比較的容易く書かれていることが多い。しかしこのG 275では、両方のチェロがほぼ同等に扱われている。頬を撫でる緩んだ風のごとく始まる第1楽章だが、まもなく2本のチェロは飛び回る2羽の蝶のように細かい音型を弾き始めて高音域へと昇ってゆき、人の耳だけでなく目をも楽しませる。他の楽章では同じ音型の名人技的旋律が、両方のチェロに交互に与えられている。王子もときには実力を試されたということなのか、それとも誰かもう一人秀でた奏者がその時にいたからなのか。重ねられたバスは下手をすれば重すぎるが、注意深く扱ったときには柔らかいカーペットのようになって、暖かく全体を包み込む。

同じ2本のチェロが全体の響きに与える影響は、シューベルトの作品ではかなり異なる。重ねられた低音は暖かさだけではなく、音楽の緊張感と相俟って全体にオーケストラのような響きを与え、深みと遠近感をもたらす。また第1楽章や第4楽章では、2本のチェロがデュエットで旋律を奏するのである。同じ楽器二つがデュエットをするのは何の不思議もないように感じられるが、多くのポツケリーニ作品では、デュエットは第1ヴァイオリンと第1チェロで行われ、低音楽器の両方が同時に旋律を受け持つことは殆どない。しかもそのチェロはしばしばヴァイオリンとほぼ同じか、それより上を弾くので、音の張りがあって華やかなものとなる。一方シューベルトの、アンサンブル全体の中音域で綿々と漂うチェロのデュエットは不思議な静謐なもの悲しさを含んでいて、聴くものを回想と沈思へと誘う。

第1ヴァイオリンと第2チェロが言葉少なに、しかし意味深く対話を始め、それが無限大に展開してゆく緩徐楽章は圧巻である。第1チェロは、ヴィオラ、第2ヴァイオリンと共に3和音をなし、時を超越してゆったりとした旋律を形作ってゆく。緩やかに、実にゆっくりと色合いを変えてゆくその響きは祈りにも似て、心の深みへと流れ込んでくる。打って変わって襲い来る嵐のような中間部分で

は、第1チェロと第1ヴァイオリンが共に旋律を奏するがそれはもはや親しげなデュエットではなく、オクターヴのユニゾンによる慟哭である。この、室内楽の最高峰とも言うべき作品は、シューベルトの生前おそらく一度も演奏されず、出版されたのは彼の死後四半世紀を経た1853年のことであった。

マドリッドという遠隔地で後半生を過ごし、113曲ものチェロ五重奏曲を書いたポツケリーニの独創的な時間、そして唯一の、しかし圧倒的なスケールをもって書かれたシューベルトの含蓄。2作品の規模や内容は、同じ弦楽五重奏がここまで変われるかと言うほどに異なっている。長年親しく付き合ってきたE. パルサ氏を迎えて、異なる二つの世界を響かせることに成功し、皆様にお楽しみいただけるよう心から願っている。

* * *

なお、今回の演奏会に伴い、山口県山口市の「山口南総合センター」にて館外公演を行います。山口は1999年の結成時の第1回演奏会の際にも館外公演を行った思い出の地。西日本にお住まいの方、ぜひおいでください! お問い合わせは財団法人 山口市文化振興財団(TEL.083-901-2222)までどうぞ。 《矢澤》

ワイルとガーシュイン、2人の音楽家をジャズがつなく。 9 / 24(土)ソング・シアター ワイルからガーシュインへ 前田祐希&佐藤允彦 ジャズ・ライブ

「芸術館でしばらくジャズを聴いていないな...」と思われていたお客様、お待たせいたしました。2001年のラルフ・タウンナー&渡辺香津美デュオ以来の「ジャズ・ライブ」、開幕です!「ソング・シアター ワイルからガーシュインへ」と名づけられたこの演奏会、ワイル(1900~50)とガーシュイン(1898~1937)という20世紀前半に活躍した2人の作曲家にスポットが当たります(近年それぞれ「ヴァイル」「ガーシュイン」と表記されることも多いですが、ここでは企画者の意図によりこの表記をとります)。「クラシック」と「ジャズ」の間を自由に行き来したこの2人の作曲家、たとえ名前をご存じなくても「スラバヤ・ジョニー」や「サマータイム」といった曲名を挙げれば「ああ、あれね」と思われるでしょう。20世紀前半の最大のヒット曲メイカーともいえるこの2人が、「ジャズ」を仲立ちにどう結ばれるのか? 企画者・間宮芳生による書

き下ろしエッセイでどうぞ!

ジャズと洗練

間宮芳生

このコンサートの主たるアイデアは、この水戸芸術館の開館の年にはじめた、私のシリーズ企画「芸術家の愛と冒険」の第8弾、モーツァルトの実にチャーミングな食卓音楽(ドイツ舞曲、コントルダンス)や、村人たちの六重奏(音楽の冗談)などを聴いたコンサートのキャッチだった「民衆とユーモアと洗練」(1994年7月)の、ジャズ・ヴォーカル版と言えるでしょう。

あの時の洗練は、伝承民衆文化の中の洗練と、それを聴きとり、さらに光らせた、モーツァルトの冴えた耳によるものだったわけですが、今度の洗練は、三文オペラ のクルト・ワイルと、スワニ

ー や「サマータイム」のジョージ・ガーシュインとの手になるもの、そしてそれら結び合わせた、20世紀世界が生んだ文化の奇蹟(奇蹟の文化)「ジャズ」です。

三文オペラ がベルリンのシッフパウアーダム劇場というところで発表・上演されるや、大当たりしたのが1928年で、当然のようにその人気は日本にもやって来ました。その第2次大戦前の日本での受容の様子を知る世代はもういないのでしょう。戦後は、台本作者のブレヒトへの関心、つまりブレヒト劇への演劇人、ことに左翼演劇青年の傾斜、熱中としての 三文オペラ 人気だったと思えばいいのでしょう。

ベルリンでの初演の成功からわずか5年後にヒトラー・ナチの時代が来て、ユダヤ人のワイルは追われるようにアメリカに渡り、ミュージカルの音



写真左から;
中川昌三
加藤真一
岡部洋一

楽に手を染めることになりました。1938年には人気ナンバー“セブテンバー・ソング”が入ったミュージカル・プレイ ニッカボッカ・ホリデイ の音楽の仕事をしています。このコンサートのチラシにも書いたように、“セブテンバー・ソング”は、後年、映画『旅愁』の中で主題歌のように扱われて爆発的な人気が出たのですが、これらアメリカ時代のワイルの歌謡を、ドイツ時代のワイルと比較して、俗化だの平凡だのというナンクセはずっとありました。

でも、三文オペラ の中で、いわば挿入歌として、芝居の進行とあまり関係なく、つけ加えられて、あたかもこの芝居のシンボルようになった歌“モリタート”(主役の一人、ロンドンの暗黒街の小悪党メッキースの悪党ぶりをこきおろす歌)のつくりやキャラクターと“セブテンバー・ソング”の出来ばえと、私にはまるで同じ、ワイルの「いいところ」に聞こえるのです。

コンサートは、この2曲の、前田祐希×佐藤允彦(ピアノ+アレンジ)による演奏を聴いたことから発想されました。つまりドイツのワイルとアメリカのワイルは、ジャズでつながっていたし、前田祐希さんの歌がそれを証明して魅力的です。

アメリカに渡ったワイルとジョージ・ガーシュインと親交が出来て、それがワイルとミュージカルの縁にいくらかつながったかもしれないということです。ドイツ時代からワイル・ソングをずっと歌って来たワイルの妻、ロッテ・レーニャの歌を聴いて、ガーシュインが「ひどい声」だと言った、という話が伝わっています。ジャズとともに育ったガーシュインが聴いていた、ゴスペルや、サッチモ(ルイ・アームストロング)やビリー・ホリデイの歌声、黒人の痛み、地の香の深みの声と比べたら、ヨーロッパ歌芝居のレーニャの声がとてつくり声に聞こえたのでしょ。

アメリカに渡って、ジャズの声をたっぷり聴いたことが、ワイルの音楽をある意味で変えたかもしれないとすると、三文オペラ 党のアメリカのワイルへのナンクセには理由があることになります。でも二つのワイルを20世紀世界の奇蹟「ジャズ」が、ひとつの本ものの歌に結び合わせるのです。

これをガーシュインにおき換えて言えば、ジャズソングのスタンダード・ナンバーになった名歌の数々を書いた、ジャズシーンの中のガーシュインと、パリのアメリカ人 や へ調のピアノ協奏曲を書いた、いわゆる「純音楽」又は「クラシック」

(どちらもいやな言葉だが)にスタンスをおいたガーシュインとどっちがいいか、のようなよくある話もまた、ワイルの場合同様、あまり意味のあることとは言えません。ここで、スワニー ど“サマータイム”(オペラ ポギーとベス からの歌)とを結び合わせるのもまた、ジャズの“洗練”です。

* * *

今回の主役・前田祐希は、ドイツで活躍後、帰国して日本のジャズシーンに新風を吹き込んでいくヴォーカリスト。すでにワイル・アルバム『One touch of Weil』(イーストワークス EWCD-0026)、ガーシュイン・アルバム『JAZZ AGE & 』(同 EWCD-0002)でニュー・ウェイヴなワイル&ガーシュイン解釈を聴かせています。クラシックとジャズのヴォーカル・スタイルを柔軟に溶け合わせる彼女の艶やかなヴォーカルは、まさにこの企画にぴったり。上記アルバムで重要な役割を果たしているピアニスト&作曲家、佐藤允彦が名ナンバーをどうアレンジするかも楽しみです。さらに中川昌三(fl)、加藤真一(b)、岡部洋一(perc)という強力サポート・メンバーも加わった極上ジャズ・ライブ、ACM劇場でたっぷりお楽しみください!

《矢澤》

最近の公演から

JUNE
JULY



1



2

1~2. ミハイル・プレトニョフ ピアノ・リサイタル

ミハイル・プレトニョフ ピアノ・リサイタル
(6月5日)

芸術館初登場、ミハイル・プレトニョフのリサイタル。プログラム前半はベートーヴェン:ピアノソナタ 第7番と第8番 悲愴。「7番は、ベートーヴェンがだんだん耳が聴こえなくなっていく姿が描かれていると思う。不安に苛まれ落ち込み、死をも考えていく 8番の冒頭はそれを暗示しているかの様に悲劇的に始まるが、芸術のために不屈の精神によって作曲を続けた生き様が感じられる。この2つのソナタはベートーヴェンの人生を表している様に感じる。」と語るプレトニョフは、2曲を切れ目なく続けて演奏しました。そして後半は、ショパン:24の前奏曲 作品28。音楽の中に秘められた歌を紡ぎだす表現力や、一切ごまかしのない見事なテクニックは圧巻でした。また、オールド・スタインウェイを好むプレトニョフのために、この日調律を担当した技術者はオールド・スタインウェイの音色を事前に聴き込み、彼の好む響きやタッチを見事に作り上げました。こ

れにはプレトニョフも大喜び。楽器もホールも気に入った様子で弾いていて本当に楽しかった」と何とも嬉しい言葉を残してくれました。アンコールは5曲も披露。 ショパン:17のポーランドの歌 作品74-1 乙女の願い リスト:小人の踊り スクリャーピン:12の練習曲 作品8-12 悲愴 ショパン:12の練習曲 作品10-5 黒鍵 ショパン:夜想曲 第20番《馬場》アンケートから今までの演奏会の中で一番素晴らしく、今回聴けて幸せでした。同じ時代に生きていられて幸せだとつくづく感じました。絵を見ているように感じた。(東京都:K.M.さん) 期待以上にすばらしかった。特にショパンはいい。アンコール、これまたすばらしい。(福島県:A.I.さん) ダイナミックではないが、ひとつひとつの音を丁寧につむぎ出しているように感じました。ロボットみたいな印象がありましたが、アンコールでのびのびと弾いているのはとても聴いていて楽しかったです。(無記名の方)

最近の公演から

JUNE
JULY



1



2



3



4



5



6



7



8

水戸室内管弦楽団第61回定期演奏会

(6月18日、19日)

水戸室内管弦楽団(MCO)の活動の大きな柱のひとつである指揮者なしの演奏会。演奏曲には、MCOの15年の歩みのなかで、演奏家にとって鮮烈な記憶を留める2つの作品、一柳慧の「汽水域」とメンデルスゾーンの「交響曲第4番『イタリア』」が取り上げられた。さらにシューベルトの「イタリア風序曲」が冒頭に置かれ15周年の祝賀ムードを演出した。MCOが1992年に委嘱した「汽水域」(フルート独奏:工藤重典)では、作曲者の表現意図を十分に伝える適確な演奏というレベルに留まらない、深遠な音響世界が創出された。「交響曲『イタリア』」は、96年の初演時には、指揮者なしで精緻なアンサンブルを行うという名人芸的な側面が聴衆を大いに魅了した。今回の演奏会では、そうした「技」はもはや当たり前のもので、どこまでも自由に、軽やかに、音は空間に放たれていった。アンコールはメンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」作品61より「スケルツォ」。《中村》アンケートから「朦朧とした水墨画を見るような一柳作品。まさしくタイトルどおり澄み切った青空と大気を連想させるシューベルトにメンデルスゾーン。色彩豊かな音の響きを楽しめました。(水戸市:T.M.さん)」「汽水域」、ぜひDVDで出してください!!どの仕事でも同じですが、合わせる気持ちはすごく大切だなと思いました。(H.S.さん)

何というかMCOの演奏には華やかなだけでなく、とても優しく温かいものを感じるのです。「汽水域」は初めに聴いたときから心にグッと迫ってきました。こんな音楽があるのですね。そして「イタリア」。指揮者がいないのに、すごいまとまりと調和。指揮者がいないからこそその伸びやかさもあるのでしょうか...?(堺市:H.N.さん)

水戸室内管弦楽団第62回定期演奏会

(7月21日、22日、23日)

水戸室内管弦楽団足利演奏会(7月24日)

大スクリーンコンサート(7月21日)

子供のための音楽会(7月22日)

音楽顧問を務める小澤征爾とMCOによるモーツァルト尽くしのプログラム。比較的演奏される機会が少ないドイツ舞曲K.571、MCOの新メンバーとなったラデク・バボラークの独奏による「ホルン協奏曲」、そして後期交響曲の中でもユニークな傑作「ブラハ」。創立15周年を迎えたMCOがマエストロ小澤とともに紡ぎ出す円熟した響きをご堪能いただけたのではないのでしょうか。アンコールには、第1回定期演奏会(1990年4月)でMCOとマエストロ小澤が最初に奏でた記念すべき曲、ディヴェルティメントK.136から第2楽章を演奏。感極まったマエストロ小澤とメ

ンバーの表情、そして熱い思いのこもった演奏はとても印象的でした。24日には足利市民会館にて館外演奏会を行い、こちらも大成功に終わりました。

今回、初の試みとなった千波公園ふれあい広場での大スクリーンコンサートには3,500人ものお客様が集まり、芝生の上で極上のモーツァルトを楽しみました。終演後には、マエストロ小澤をはじめ、管楽器、打楽器のメンバーが会場に駆けつけるという嬉しいハプニングも。会場は大いに盛り上がりました(「vivoice」をご覧ください)。

恒例となりつつある「子供のための音楽会」は茨城県武道館を会場に開催。市内の小学5年生を中心に約2,300人の子供たちが、美しい演奏と楽しい楽器紹介に目を輝かせていました。《関根》アンケートから「ラデク・バボラーク、すごい!!デニス・ブレインの再来?否それ以上かも。(水戸市:A.S.さん)」「こんな「ブラハ」は初めて。キレイな音、清澄な音、メリハリのある音、柔らかくて、本当に至福の時を過ごしました。とにかく素晴らしい。(水戸市:Mさん)」「創立15周年にふさわしい内容の演奏会の場にいられたことをまず感謝しました。格調高いモーツァルトに心酔しきりました。アンコール曲、K.136の響きはいずれもMCOの中で最高の味わい。涙があふれてとまりませんでした。(水戸市:S.H.さん)」

第44回あひる会合唱団定期演奏会

(7月30日)

「茨城の演奏家による演奏会シリーズ」の一環として、あひる会合唱団が登場しました。常任指揮者を務める鈴木良朝氏の指揮活動50周年を記念する演奏会で、特別なプログラムが組まれました。第1ステージでは菅波ひろみ氏の指揮により、あひる会が得意とするルネサンス音楽からピクトリアの作品3曲を演奏。第2ステージではあひる会と深い関係を持つ作曲家、池辺晋一郎氏が登場。あひる会が委嘱初演した「人体詩抄・抄」の「目」「背中」などを池辺氏の指揮により演奏しました。第3ステージでは鈴木氏の指揮、生井澤紀江氏のピアノにより、モーツァルトの「戴冠ミサ」を演奏。何人かのOG、OBも加わり、記念すべき演奏会を熱演で締めくくりました。《関根》アンケートから「身体にひびいて、感動しました。(水戸市:S.H.さん)」「静かに長くのびている音の素晴らしさ。阿音三辺(池辺氏の曲)の難しい曲をみごとに歌っている。どの曲も感激しました。(無記名の方)」「合唱団のハーモニーがとてもすばらしかった。大変よくまとまっており、練習の積み重ねが分かります。これからも末永く続けてください。指導者の暖かさが伝わってきます。(国分寺市:T.M.さん)」

1~2. MCO第61回定期 3~4. MCO第62回定期 5. 大スクリーンコンサート 6. 子供のための音楽会
7~8. あひる会合唱団



本日のMCO大スクリーン・コンサートは超大満足でした。いままで経験のなかったイベントでしたが、本日の天候といえ、時間帯・場所といえ、なんと雰囲気は満ち溢れていたことか！それに世界の小澤征爾とMCOの息の合った演奏のすばらしさ。大スクリーンのバックの豊かな森(緑)と夜空の彩りが、白昼から宵へ、宵から夜へ移ろいでゆく、その自然の美しさと、音楽の奏でる妙なる調べとが、絶妙に溶け合い、視覚・聴覚と心に共鳴し、贅沢で、至福のひとつを味わうことができました。水戸芸術館の生演奏会から、小澤さん自身と楽団員の一部の方が会場に駆けつけて聴かせてくれたミニ・コンサートも、レストランで美味しいご馳走を食べた後、レストランのオーナーから、特別サービスとして、普段あまり口にするのでできない、珍しい美味しいデザートを提供していただいて、思いもよらないご馳走を食べたような気分でした。おまけに、抽選会ではMCOのロゴ入りのTシャツまで当たり、今日は忘れるのできない幸せで心豊かな一日となりました。企画していただいた水戸芸術館はじめ関係者に心から感謝いたします。アンコール企画を期待しています。(東海村・佐藤盛男様)

昨晩はスタッフの方々、お疲れさまでした。私は愛知県へ出張していたのですが、このイベントに参加するために長駆、水戸へ戻り、後半のブラハ交響曲とミニ・コンサートを楽しみました。私は22日の演奏会のチケットを買っていたのですが、21日のイベントは、予習のようなコンサートでしたがとても楽しかったです。生のコンサートは頻繁に行っているのですが、TV画像でMCOのコンサートを見るのははじめてでした。小澤さんの指揮のディテールや、演奏者同士がおとなりの人の音を聞きながら演奏している様子がかかなりよく分かりました。

私が札幌在住時、PMFのピクニックコンサートへよく行ったものでしたが、そのことを思い出しながら、聞いてました。このようなイベントが、定例で行われると、水戸の新たな風物詩になると思います。会場から芸術館が見えるという距離感、芸術館から会場へ小澤さんや演奏者が駆けつけてくれるというライブ感がとてもイベントを盛り上げたと思います。

偕楽園公園がかなり整備されてきた中で、このようなイベントを定例化するならちょっとした気が利いたステージをつくったらよいと思います。

私、個人的には水戸芸術館の音楽会は、一部の音楽愛好家のためにあるような位置づけのような気がしていましたので、広く市民の方に、音楽や芸術館をさらに認知してもらうためにはこどものためのコンサートや今回のようなイベントは不可欠ではないか

水戸室内管弦楽団第62回定期演奏会に際し、7月21日(木)に「千波公園ふれあい広場」で行われた「大スクリーンコンサート」(4ページの演奏会レビューをご覧ください)は、おかげさまで3,500人を超えるお客様がお集まりくださり、大好評をいただきました。芸術館のホームページにも熱のこもったご意見をたくさん頂戴いたしましたので、ここでその一部をご紹介します。なおここに掲載し切れなかったものを含めた全部を、ホームページ上でご紹介しておりますので、以下のURLをどうぞご覧ください。<http://www.arttowermito.or.jp/music/kanso05senbaj.html>

と思います。今度も楽しい企画をよろしく願います。(エピータ様)

いつもの様に夕方妻と千波湖をウォーキングをしていると、昨日湖畔のふれあい広場に設置していた大スクリーンで今水戸芸術館でやっている小澤征爾指揮の水戸室内管弦楽団をリアルタイムで放映するとのこと。ラッキーとばかりに芝生に脚を伸ばして汗を拭きながらコンサート鑑賞としゃれこんだ。スピーカの音も映像も想像以上に性能が良くまるで水戸芸術館に居るようなコンサートに大満足。今日の千波湖は涼しく蚊もいない。

そこへまたラッキーな報せ！大スクリーンの中の小澤さんが今から千波湖に行くと言いました。まさか、野外でステージも用意してないのにどうするのだろうと思っているうちにご本人が赤シャツ、ジーパン姿で何人かの楽員を引き連れてやってきたではありませんか。

小澤さんの第一声、「野外で、しかもスピーカを通してだが、演奏はよく聞こえましたか？」てっきり超有名人の挨拶がでると思っていたが、彼の心配は聴衆と音楽でした。私は5～6mの近くから精一杯の大声で「よ～聞こえたよ～」。このあと各楽器の演奏家たちが代わる代わるソロでアドリブ演奏をしました。コンサートホールではご出席の吉田秀和先生を讃えて涙を流した小澤さんが、コンサート直後にも拘らず水戸の片田舎までやってきて聴衆と一緒に話したり演奏したりする姿を見て、これが本当に世界中を走り回っている人なのかと我が目を疑う。楽員もいかに音楽が好きそうな人達ばかりで皆わきあいあい小澤さんの精神が浸透しているのがよく分かる。

久しぶりに元気をもらって気力充実、来年は少し節約して定期公演を聴きに行こうと決めた。家へ帰って妻とワインで小澤さんに感謝の乾杯。いつまでもコンサートの話をしながら遅い楽しい夕飯になりました。(西村 博司様:68歳)

こう言っは失礼だが、茨城県民は芸術文化に關しても、首都圏に隣接しているはずなのにレベルが低いと思っている。そして、茨城で開催されるイベントが盛り上がり欠ける要因の一つは観客にあると思っている。今回も、そう言った不安の中で行われたコンサート中継は、それらを差し引いても十二分に楽しめるコンサートであった。

確かに、小澤征爾とR.パボラークがモーツァルトのホルン協奏曲を演奏するとなれば、日本全国、どこで開催しても満員御礼になるのは当然であると思う。今回、音楽ファンのみならず、老若男女を問わず、野

外コンサート中継に集客をもたらした最大の要因が、演奏内容を期待してではなく、世界のオザワと言う知名度であったことは間違いのないであろう。

しかし、今回は3500人の、あの茨城県民が屋外でビールとつまみを片手に見守るのだ。私の中では、退勤時のJR常磐線内のサラリーマンの飲み会同様に、雑然とした中で中継が始まり、終始、コンサートを鑑賞できる状況にはならないと予想していた。

しかし、18時35分にタクトダウンされた直後から、会場の人々は、そのスクリーンに釘付けになっていた。水戸室内管の少数精鋭のアンサンブルは厚く、そして熱い音楽の中に、常にゆとりが感じられる。モーツァルトがそれらしく聴こえる。東京でもこんなモーツァルトは年に数回聴ければ良いのではないか。そして、オーケストラが知り尽くした水戸芸術館の響きも心地いい。それは千波湖畔のスピーカにも十二分に伝わってきた。パボラークが出てくるまでも無く、このコンサートの成功は確信できる物となっていた。

そして、心地良い緊張感、ホルン協奏曲が始まって、常に聴衆をとりこにしていた。ロストロポーヴィチのチェロでも無く、ハーデンベルガーのトランペットでも無く、比較的マイナーなホルンを選んだ事により、それでもなお、会場全体がその音楽に引き寄せられたのが、コンサートの素晴らしさを証明しているのではないか。

気づいた時には周りは夜の風景となっていた。周りのご老人方もホルン、オーケストラ、指揮者を楽しんでご満悦な表情である。普段、コンサート会場に入場できない乳幼児を連れた親子にとっても、素晴らしい企画であったらう。本当に良い音楽を聴けば、どんな年代、客層でも引き込まれると証明して見せてくれた。

今回の企画が、ベルリンフィルのピクニックコンサートを目指しているのであれば、それでもなら問題無いと思う。願うのは、こうして私たち一般市民が幅広く、一流の音楽に触れる機会が定期的にある事、そして市民が待ち望んでいるイベントになる事だ。

最近の水戸芸術館の活動には目を見張るものがある。今回のコンサート以前から、そう言った活動により、聴衆も少しずつ育てられてきていたのかもしれない。背景には、吉田秀和館長の十年以上に渡る地道な活動によるところが大きいと感じた。私も含め、地元の人間は、その偉大なる人物に敬意を表し、その活動に目を向けなければならないと感じた。

是非、来年も開催してください。茨城が代表する夏の音楽祭はロックフェスタだけでは無くなる日がくるはずです。(ブレイン様:29歳)

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸「芸術よもやま話」金曜日18:15頃~15分ほど。水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

チケット・インフォメーション 9月3日(土)発売分

水戸室内管弦楽団第63回定期演奏会

11/5(土)18:30開演、11/6(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,000 A席¥5,000 B席¥3,500

水戸室内管弦楽団第64回定期演奏会

11/19(土)18:30開演、11/20(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥10,000 A席¥8,000 B席¥6,000

第63回と第64回のセット券(限定400セット):S席¥14,000 A席¥11,000

水戸室内管弦楽団定期演奏会には、8月31日(水)より友の会の先行電話予約があります。

9月4日(日)発売分

佐藤篤 ピアノ・リサイタル

12/10(土)16:00開演 料金(全席自由):¥4,000

茨城演奏家連盟優待券¥1,000(茨城演奏家連盟事務局[029-252-2755]のみの取り扱い)

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

ミト・デラルコ 第8回演奏会

9/11(日) ...中央x、左右・裏

ソング・シアター ワイルからガーシュインへ

9/24(土) ...1F・2F、3F正面

山口泉恵 ピアノ・リサイタル

10/2(日) ...自由席

茨城の名手・名歌手たち 第16回

10/8(土) ...自由席

マティアス・ゲルネ バリトン・リサイタル

10/16(日) ...中央、左右・裏

8/14(日)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な9月のスケジュール

コンサートホールATM

ミト・デラルコ 第8回演奏会

9/11(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

エントランスホール

パイプオルガン ブロムナード・コンサート

9/3(土)13:30/15:00 9/4(日)12:00/13:30

9/10(土)12:00/13:30 9/25(日)12:00/13:30

入場無料 演奏は各回20分程度です。

エントランスで踊ってみる19

9/10(土)15:00/18:00 入場無料

ACM劇場

第9回水戸短映像祭

9/17(土)「亀は意外と速く泳ぐ」13:00~ 料金:¥1,000

「涙がでる」15:30~ 料金:¥1,000

「female」17:00~ 料金:¥1,000

「シラレゾGP2」19:15~ 料金:¥1,500

9/18(日)「湘南瓦屋根物語」14:00~ 料金:¥1,000

「キズナドラマ」18:00~ 料金:¥1,500

9/19(月)「祝」コンペティション部門」12:00~ 料金:¥1,000

詳細はお問い合わせ下さい。 TEL / 029(227)8111(代)

ソング・シアター ワイルからガーシュインへ

前田祐希&佐藤允彦 ジャズ・ライブ

9/24(土)18:30開演 料金(全席指定):A席¥3,500 B席¥2,500

現代美術センター

「HIBINO EXPO 2005 日比野克彦の一人万博」

8/6(土)~9/19(月・祝)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日

入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な9月の演奏会

佐川文庫 TEL / 029(309)5020

ミリヤム・コンツェン コルネリア・ヘルマン デュオ・コンサート

9/3(土)18:00開演

常陽藝文センター TEL / 029(231)6611

上妻宏光“生一丁”ツアー2005 9/4(日)18:00開演

(問)EVANS TEL / 029(251)6665 (13:00~)

茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166

星野由美子 ジャズコンサート・ジャズボーカル教室発表会同時開催

9/3(土)14:00開演

音楽座ミュージカル「21C:マドモアゼル モーツァルト」 9/10(土)18:30開演

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

ディ・クライゼ ベートーヴェン ピアノソナタ 全32曲演奏会 第2回

9/16(金)18:30開演

塩塚隆則 テノール・リサイタル 9/17(土)15:00開演

(問)クリエ音楽教室 TEL / 029(274)7701

栗田美奈子サクソフォン・リサイタル 9/18(日)13:30開演

熊本マリ ピアノコンサート 9/21(水)18:30開演

(問)関山楽器 TEL / 029(273)6803(10:00~19:00)

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7755

アンサンブルの祭典2005コンサート 9/11(日)13:00開演

第4回『土肥 敬 チェロソナタとピアノトリオの夕べ』 9/16(金)18:30開演

(問)有田 TEL / 0424(84)9086

日立市民会館 TEL / 0294(22)6481

倉本裕基オータムコンサート2005 9/4(日)15:00開演

鹿嶋勤労文化会館 TEL / 0299(83)5911

クーベリックトリオ演奏会 9/10(土)18:30開演

ブルース・アーベル・リーダー・イベント(歌曲の夕べ) ピアノ伴奏:白澤暁子

9/17(土)18:30開演

コンテンボ弦楽四重奏団演奏会 クラリネット:近藤良 9/30(金)18:30開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

マリア・エステル・グスマン ギター・リサイタル 9/18(日)15:00開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

18世紀リコーダー音楽“愛する人の肖像” 9/2(金)19:00開演

榊原道子・米元えり ピアノ・デュオ・コンサート

オーケストラ編曲のあるピアノデュオ曲を集めて 9/23(金)14:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2005年9月発行 第109号

編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp]

編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃

馬場千恵 矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...

秋に薫る、独逸浪漫派歌曲。